

## 第3回「わかもの学会」を開催

2月4日(土)、第3回「わかもの学会」を実施した。今回は、各学部から選出された優秀発表2組ずつ、計6組の学生が日頃の活動報告や卒業論文を発表した。研究の特長がよく表れ、大変興味深い内容となった。長谷川睦さん(環境情報学部4年)は、時期と護岸環境によって生息するプランクトンがどのように異なるかを分析し発表。ベトナム出身のブイ・タン・タムさん(経済学部4年)は、大学で学んだマネジメントを生かしてベトナム風サンドイッチ店を実際に東京で開店し、その経営のリスクや他店分析などについて発表した。

6組の発表後、審査が行われ、四日市大学学長の岩崎恭典より、よく調査したことに対する賞賛とともに、調査から得たデータを分析する手法の重要性などについて講評があった。表彰では、最優秀発表賞に、情報科学の視点から鈴鹿山脈の廃村集落を調査し、アプリケーションを制作した伊藤大地さん(環境情報学部4年)、優秀発表賞に高齢者が住みやすい地域についての研究を行った岩崎・小林ゼミ混成チーム(総合政策学部3年・4年)が選ばれた。それ以外にも、ロビーでは学生による活動の報告や、映像作品の上映、教員による地域連携活動のパネル展示などが行われた。



## 公開講座「米国野球界の人材育成」を実施

2月12日(日)、じばさん三重にて、若山裕晃教授(総合政策学部)が公開講座「米国野球界の人材育成」を実施した。内容は、大リーグと日本の野球の練習方法や試合に関するシステムの違いに焦点を当て、そこからうかがえる人材育成に対する考え方に言及。特に、「ブロック練習(課題Aの練習を全て完了してからB,そしてC)」と「ランダム練習(課題A,B,Cをランダムに混ぜ合わせた練習)」について、「日本ではチーム練習でもブロック練習を重視するが、大リーグではブロック練習は主として個人的に行い、キャンプでの練習はランダム練習に時間を割く」ことを日米の相違点のひとつとして説明し、実際に指導される方にも参考になったようだ。実施後、受講者の方からも、講座内容にも満足していただいたというご意見を頂戴し、四日市大学におけるスポーツ指導に関する教育内容を学外の方々に知っていただく良い機会となったようだ。



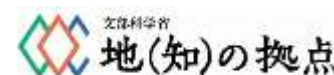
## 3年生対象・就職活動研修会を開催

2月14日(火)3年生対象の就職活動研修会を開催した。午前中は、グループディスカッション演習と就職活動マナー演習を行い、グループディスカッション演習では自己紹介、役割分担から始まり、課されたテーマについてグループでの結論を導き出した。

また、マナー演習ではあいさつ、身だしなみ、立居振舞など就職活動に欠かせないマナーのポイントを学んだ。午後に行われた業界研究セミナーでは、地元企業10社の方より各業界の仕事について話していただいた。間もなく本格的に始まる就職活動に向け、参加学生は真剣に取り組んでいた。



これまでのPick Up Topicsは、ホームページでご覧いただけます。  
<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/examinee/topic.html>

 Pick Up Topicsには、COC事業における記事が含まれています。

学校法人 暁学園 四日市大学

【発行】入試広報室

〒512-8512 三重県四日市市萱生町1200

TEL:059-365-6711 FAX:059-325-7218

<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/>

<http://smile.yokkaichi-u.ac.jp/> (受験生サイト)

世界を見つめ 地域を考える

YOKKAICHI UNIVERSITY  
**PICK UP TOPICS**

建学の精神 人間たれ

2017年4月1日発行【季刊誌】

VOL.

**37**

P.1・オーストラリア海外環境・語学研修を実施

P.2・三重の第一次産業体感ツアー熱議  
・おもてなし企業セミナーを開催  
・常磐地区での避難所開設・運営訓練に学生消防団員が参加

P.3・環境シンポで神長教授が講演・パネラーに学生も参加  
・千葉教授が環境県民講座を担当  
・「特定プロジェクト研究(観光)」学習会を実施  
・四日市公害と環境未来館協議会で鬼頭教授が提言

P.4・第3回「わかもの学会」を開催  
・公開講座「米国野球界の人材育成」を実施  
・3年生対象・就職活動研修会を開催

## オーストラリア海外環境・語学研修を実施



2月13日(月)から25日(土)の13日間、環境情報学部主催のオーストラリア海外環境・語学研修が豪州クィーンズランド大学で行われた。この研修プログラムでは、午前中に環境やエネルギーにかかわる、豪州での政策や地域自治体、企業などの動向を通訳付きの講義で学び、午後からは、企業や水処理施設、廃棄物処理工場、埋立地、環境保護区、ブリスベン川・湾などを視察するものだ。その他、生きた英語に触れることができる、英会話レッスンも好評だ。参加学生は全期間をホームステイで過ごし、おらかなオージーの生活を目の当たりにすることも貴重な体験だ。

13日(月)の正午前に四日市大学生と、合同参加となった三重大学生、引率の教員らがセントレアに集合し、韓国のインチョン経由で、翌14日(火)現地時間午前7時ごろ、ブリスベン国際空港に到着。広大な敷地面積を誇るクィーンズランド大学をキャンパスツアーし、学生食堂での昼食後、プログラムに関する概要説明が、いきなりの通訳無しで行われた。その後、「Cleaner Production Techniques」という環境に関する講義が行われ、夕方には、ホームステイ先への初訪問と、オーストラリア滞在の初日から、とてもハードなものとなった。

翌日からは、ゼラチンの工場やゴミ埋立地の視察、先住民(アボリジニ)の文化を体験、環境保護区や炭素取引についての講義など盛り沢山の内容。また、講義の合間には、コアラやカンガルー、イルカやウミガメなど野生動物との出会いを体験し、日本では考えられないような美しい自然の中で、プログラムは進行した。夜はホストファミリーとの楽しい交流や、時には自分達だけで街へ繰り出し、レストランで食事したりと、最初は緊張した面持ちだった学生達は、次第に好奇心旺盛な若者へと日増しにたくましく成長していったようだ。楽しかった日々はあっという間に過ぎ、24日(金)は当校最終日。午前中は、修了式が行われ、午後からのゴールドコーストツアーでは、がんばったご褒美とばかりに全力で体感。すっかりオーストラリアに慣れた学生達は「帰りたくない!」と後ろ髪を引かれつつ、25日(土)に全員無事に帰国。参加した学生達から、一様に本当に来てよかったという感想が聞かれたこの海外研修。今後はこの内容をより工夫することで、さらなる教育効果を高める研修へと発展させていく予定だ。このプログラムの詳細は、受験生サイト「スマイル四日市大学」で公開されている。



## 三重の第一次産業体感ツアー—熟議

2月12日(日)、「第一次産業(林業、水産、農業)体感ツアー」の報告会が、三重大学総合研究棟Ⅱメディアホールにて開催された。これは、「COC+で地域を知ろう」をキャッチフレーズに、三重大学が、地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)の一環として、県内の高等教育機関に呼びかけて実施したものだ。本学から三林郁紀さん(経済学部2年)、川島潤子さん(環境情報学部3年)、東村篤特任教授(経済学部)が参加した。

午前の部では、林業、水産、農業が各2班に分かれ学生メンバーから発表があった。三林さんは「経営に関心があるのでその視点で現地を見て体感し、農作物による採算の相違、小規模経営と大規模経営の省力化、コスト意識、組織体制などが勉強になりました」と語り、川島さんは「三重県が南北に170キロもあり、東紀州地区に足を踏み入れる機会がなかったが、今回、行って初めて知った事ばかりで、知る事がいかに大事であるかと言う事を大いに感じました」と力説した。午後からは、第一次産業のそれぞれの分野のあり方、提案について「三重をもっと元気に!」をテーマに、6班に分かれて討議し、教員、企業、自治体、地域おこし協力隊などの方々もグループ討議に加わり、それぞれの立場、視点の違いから議論白熱、まさに「熟議」に相応しい内容となった。

今年度の事業は、農林水産地域の魅力発見と6次産業化への道筋に観光をも含め、地域の担い手としての「三重のファンタジスタ」養成のためのトライアル事業だ。学生達は、少子高齢化が進む中での事業承継問題、ブランディングの問題、アグリビジネス問題など様々な切り口から若者なりに熟議を通じて感じ取ってくれたようだ。



## おもてなし企業セミナーを開催

2月21日(火)、「おもてなし企業セミナー」を開催した。本セミナーは、本学が採択された経済産業省サービス経営人材育成事業である「産学連携による伊勢志摩『おもてなし経営』のための人材育成事業」の一環だ。学生が卒業後、観光業の中核を担うイメージをつかむと同時に、現場で求められる人材像の育成に向けたプログラムの有用性を確認することを意図したものだ。

前半は、本事業リーダーの岡良浩准教授が「おもてなし経営」を実践している各企業の担当の方を前にプレゼンテーションを行い、後半は、各教室に分かれ、ブース形式にて、学生及び教員が企業と交流する場が設けられた。当日は、企業4社(1社は資料のみ配付)と学生9名、プログラムの開発に関わる教員4名と職員1名の参加だったが、「おもてなし企業とは何か」について、立場を超えて考えるよい機会となった。参加された企業の担当の方からは「就活とは違うかたちで学生の想いが聞けてよかった」、「地域に根ざした大学や企業の取り組みが聞けてよかった」との声をいただいた。

## 常磐地区での避難所開設・運営訓練に学生消防団員が参加

2月12日(日)四日市市常磐地区で、避難所運営訓練が開催された。本学からは、学生機能別消防団員が6名参加し、運営に模擬参加した。今回の想定は、南海トラフ巨大地震が訓練当日の朝7時に発生し、三重県南部で震度7が観測され、大津波警報が発令されるというものだ。

初めての大きかりな訓練だったため、避難者数の把握に苦労し、人数の確認ができないままに食料とペットボトルを配布してしまったり、情報共有がうまくいなくなるなど、課題も多く見つかった。傷病者の搬送訓練、炊き出し訓練なども並行して行われ、参加者にとっては実際の避難所に近い体験になったようだ。



## 環境シンポで神長教授が講演・パネラーに学生も参加

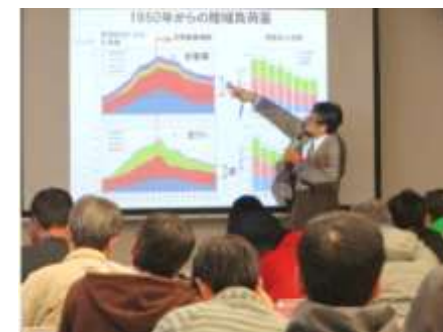
1月21日(土)、「四日市公害と環境未来館」にて、環境シンポジウム「四日市公害から学ぶ環境と持続可能な社会づくり」が開催された。まず神長唯教授(総合政策学部)が登壇し、『『全国の公害資料館』を訪問して』と題して約一時間の講演を行った。自ら撮影した豊富な写真映像とともに、他地域の公害資料館と「四日市公害と環境未来館」との違いなどについて説明した。その後パネルディスカッションを行い、本学の花村光さん(環境情報学部2年)もパネラーの一人として発言した。花村さんは、若い世代として、どのように四日市の今を発信していくべきか、自身の経験に基づき、ていねいに発言していた。

## 千葉教授が環境県民講座を担当

1月21日(土)、三重県立博物館(MieMu)で三重県主催の環境県民講座が実施され、千葉賢教授(環境情報学部)が講師を務めた。「数値シミュレーションによる貧酸素水塊の未来予測」と題し、約60名の聴講者が参加した。

講座の内容は、「数値シミュレーションとはどのようなものか」、「伊勢湾で今何が起きているのか」、「貧酸素水塊の発生と短期変動のしくみ」、「貧酸素水塊長期化の原因推定」、「数値シミュレーションによる貧酸素水塊の未来予測」、「伊勢湾の漂流漂着ゴミ問題」に分かれ、教授がYouTubeにアップしている数値シミュレーションの動画や、伊勢湾の立体地形を見せるWebアプリ、環境情報学部の伊勢湾海洋調査実習の写真の紹介もあり、楽しめる工夫も織り込まれていた。

会場からは、「江戸時代にも貧酸素水塊は発生していたのか」、「下水処理場は伊勢湾の環境に役立っているのか」などの質問があり、参加された多くの方が、伊勢湾の環境問題に興味を持たれたようだ。



## 「特定プロジェクト研究(観光)」学習会を実施

2月13日(月)、「特定プロジェクト研究：四日市大学ぐるみの産官学民連携ツーリズムの研究」では、JTB中部(株)の平野宣行氏を招き、学習会を実施した。午前中は、四日市地域の観光・シティプロモーションの促進に、大学や学生がどう関与できるかについてディスカッションを行い、四日市港の魅力や観光スポットとしての可能性について、活発な意見交換があった。

午後からは、その四日市港を中心に視察研修を実施。臨港橋(跳ね橋)や末広橋梁(跳開式可動橋)、国の重要文化財に指定されている潮吹き防波堤、豪華客船が停泊する第24号埠頭、四日市港ポートタワーを見学した。担当教員らは、この日に見聞きしたことを念頭に、次年度以降のプロジェクト実施内容を検討する予定だ。一方で、近隣住民との関係の構築や、駐車場の確保など、検討の余地があることも再認識したようだ。



## 四日市公害と環境未来館協議会で鬼頭教授が提言

2月22日(水)、鬼頭浩文教授(総合政策学部)が副会長を務める、平成28年度第2回四日市公害と環境未来館協議会が開催された。同協議会は、公害患者、学識経験者、市民団体、地元企業、博物館などの関係者が一堂に会して「四日市公害と環境未来館」のよりよい運営をめざし、協議を重ねるものだ。この日も、関係者による活発な議論が交わされた。鬼頭副会長は、今後散逸する可能性もある関連資料の収集・保存、整理の加速化を提案した。

また、後期事業報告の一環で、COC公開講座や学生インターンの受け入れ、電子顕微鏡を用いた共催講座などの本学との連携企画も紹介された。なお、3月21日、「四日市公害と環境未来館」は、いよいよ開館3周年を迎える。